

## ヨーロッパの巡礼

ヨルダンとイスラエルの国境に「エルサレム」があります。ここはユダヤ教やキリスト教、そしてイスラム教の大聖地です。巡礼者たちはイエス・キリストが十字架にはりつけにされ、そして痛ましく処刑されたゴルゴタの丘を目指してゆきます。その丘はエルサレム郊外にあり、<sup>けいけん</sup>敬虔な巡礼者は主の受難をしのびつつ、昔ながらの石畳を踏みしめて巡礼の道を黙々として登ってゆきます。この巡礼道は、世界遺産として最初に登録された道です。ちなみに、第二番目の道の世界遺産は、高野山へ登る<sup>ちよういしみち</sup>「町石道」です。公式には「紀伊山地の霊場と参詣道」と呼称されて、熊野と吉野の古道も編入されました。

さて、サウジアラビアの南には聖地「メッカ」が所在します。ここはマホメットの生誕地です。熱心なイスラム教徒は毎年この聖殿へ十万人ほどが巡礼するようですが、異教徒は入ることが許されません。一神教には他の宗教を絶対に寄せつけないという厳しい規則が守られているからです。

サンティアゴ・デ・コンポステーラへの巡礼の記録は、951 年のものが最古のようです。11 世紀にはヨーロッパ中から多くの巡礼者が集まり、最盛期の 12 世紀には年間 50 万人を数えました。巡礼は、今も昔も国と国の文化をつなぐ役目を果たしています。

アジアは多神教の国が多く、ヨーロッパの一神教に比べますと、その性格は非常におとなしように思われます。一神教の地域は昔から民族紛争が多いようですが、これは他の神を絶対に認めず、厳格に排斥するという宗教観に起因しているからでしょう。長い歴史のうえでも、多神教の東洋からは流血におよぶような宗教戦争はほとんど起こりませんでした。一神教から眺めれば、多神教はだらしないくらいにおおらかなところがあるからでしょう。